

Īśvarapratipattiprakāśa における 諸主宰神論の統合方法の解明

眞 鍋 智 裕

Elucidation of Integration Method of Supreme God Theories in *Īśvarapratipattiprakāśa*

Tomohiro MANABE

Abstract

The *Advaita* school, one of the philosophical schools of India, aims to be liberated from transmigration through realization of *brahmātmaikyatva* on the basis of the *Upaniṣads*. Therefore in this doctrine, belief in a supreme god as a personal savior is not significant and traditionally was not put forward as a major thesis. However, with the historical background of the establishment of Islamic dynasties in India, the philosophical schools centered their beliefs in Lord *Viṣṇu* or Lord *Śiva* who rose one after another and flourished after the 12th century. Thus, the *Advaita* school took issue with those new schools while adopting their beliefs in a personal deity into its own system and integrating itself with them.

A person who played an important role in integrating the *Advaita* doctrine with belief in a personal deity was Madhusūdana Sarasvatī, who wrote splendid works in 16th century. This paper addresses his view of a supreme god, treated in his work *Īśvarapratipattiprakāśa* (ĪPP). In ĪPP, Madhusūdana presents his unique supreme god theory by giving a reinterpretation of the supreme god theory of the *Pāñcarātriḱa*, one of the *Vaiṣṇava* schools, by attaching authority to its theory by the *Advaita* doctrine. Moreover, supreme god theories of other *Vaiṣṇava* schools and *Śaiva* schools are integrated into ĪPP. This paper determines the nature of and the process by which Madhusūdana developed his supreme god theory and thereby how he integrated the supreme god theories of theistic schools.

1. 問題の所在

アドヴァイタ (Advaita, 不二一元論) 学派は、インドの哲学学派である五ヴェーダーンタ伝統学派⁽¹⁾の中で最も成立の早いものである。この学派は、ウパニシャッド等の天啓聖典 (śruti) に基づき梵我一如を自力で悟ることによって解脱を得ることを最高の目的としている。そのため、解脱を得るために人格的な主神 (主宰神, īśvara) を信仰する必要がない。また、解脱という観点から言えば主宰神の果たす意義は重要ではない。そのため、伝統的にアドヴァイタ教学の中に主宰神の意義が積極的に位置づけられることはなかった。

しかし、本稿で取り上げる16世紀のアドヴァイタ論者であるマドゥスーダナ・サラスヴァティー (Madhusūdana Sarasvatī) の時代は、ヒンドゥー教二大教派の主神であるシヴァ神やヴィシュヌ神に対する信仰運動が盛んであり、二大神信仰をそれぞれ哲学的に体系づけた哲学諸派が勢力を拡大していた⁽²⁾。そのような状況の下、元来主宰神を必要としなかったアドヴァイタ学派も、その教学の中に主宰神信仰を受け入れ、次第に有神論化していった。そして、その際に重要な役割を果たしたのがマドゥスーダナである。マドゥスーダナはその著作の中で、彼の時代に様々に説かれていた神概念を、アドヴァイタ教学の中に体系的に吸収することによって整理し

ようとした。筆者は、彼の著作 *Siddhāntabindu* (SB) と *Īśvarapratipattiprakāśa* (ĪPP) ⁽³⁾ に見られる主宰神観を検討することによってそのことを明らかにした ⁽⁴⁾。

そのような思想活動に際し、マドゥスーダナは ĪPP において、ヴィシュヌ派の一派であるパンチャラートラ派 (Pāñcarātrika) に特徴的なヴィューハ説 (vyūhavāda) をアドヴァイタ教学に取り込んでいる。そしてそのことによって、ヴィシュヌ神をアドヴァイタ教学の中に位置づけようとしている。またヴィューハ説をアドヴァイタ教学化することによってパンチャラートラ教学を再構成しようとするのみならず、12世紀に活動したヴィシュヌ派の学匠ヴォーパデーヴァ (Vopadeva or Bopadeva) の教学やシヴァ派の教学までもそのアドヴァイタ教学化したヴィューハ説の中に統合しようとしている ⁽⁵⁾。本稿では、ĪPP の該当箇所を検討することによって、マドゥスーダナがこれら有神論諸派の教学をアドヴァイタ教学の中にどのように位置付けているのか、ということをはっきりさせたい。

2. *Īśvarapratipattiprakāśa* におけるサンカルシャナのアドヴァイタ教学化

マドゥスーダナは ĪPP において、主宰神の個性 (viśeṣana) を説明するに当たり、ヴォーパデーヴァとシヴァ派の教義体系の、主宰神が五様の姿を採るといふ主宰神論を紹介する ⁽⁶⁾。しかしその後、*Nṛsiṃhottaratāpanīyopaniṣad* (NUTUp) に主宰神の四様の区分が説かれている ⁽⁷⁾ として、主宰神がヴァースデーヴァ (Vāsudeva)、サンカルシャナ (Samkarṣaṇa)、プラディユムナ (Pradyumna)、アニルッダ (Aniruddha) の四様の姿を取ることを説き始める。この四者は、ヴァースデーヴァ、即ちクリシュナ (Kṛṣṇa) 神とその神話上の親族である。更にパンチャラートラ派のヴィューハ説は、ヴィシュヌ神 (クリシュナ神) が世界創造に当たり次第に後三者の姿を取る、と説くものである ⁽⁸⁾。マドゥスーダナは、このヴィューハ説を天啓聖典である NUTUp によって権威付け、アドヴァイタ教学化しようとしているのである ⁽⁹⁾。以下に該当箇所を検討する。

Text 1 ĪPP 7, 18-22:

tatra pañcīkṛtamahābhūtābhimānī virāṭ tadantaryāmī paramātmā otaḥ sthūla ucyate, sa evāniruddhaḥ. evam apañcīkṛtamahābhūtābhimānī jīvo hiraṇyagarbhaḥ tadantaryāmī anujñātā paramātmā sūkṣma ucyate, sa eva pradyumnaḥ.

その中で、五分結合した元素を私と思ひなしたヴィラージュ (virāj), その (ヴィラージュの) 内制者である最高のアートマンが, [NUTUp において] 粗大なものであり, 羅織 (ota) である, と言われる。彼こそがアニルッダである。同様に, 五分結合していない元素を私と思ひなした命我であるヒラニヤガルバ (hiraṇyagarbha), その (ヒラニヤガルバの) 内制者である最高のアートマンが, [NUTUp において] 微細なものであり, 認可者 (anujñātṛ) である, と言われる。彼こそがプラディユムナである。

先ずここでは、アニルッダとプラディユムナに関する解説がなされている。アドヴァイタ教学において、現象世界は粗大な物質と微細な物質から成ると考えられている。そして、最高のアートマンが、その粗大な物質を構成する五分結合した元素 ⁽¹⁰⁾ を私と思ひなすヴィラージュ ⁽¹¹⁾ を内部にあって制御する状態にあることが、NUTUp においては粗大なもの、羅織と言われており、またそのようなアートマンがアニルッダである、というのである。また、最高のアートマンが、微細な物質を構成する五分結合していない元素を私と思ひなすヒラニヤガルバを内部にあって制御する状態にあることが、NUTUp においては微細なもの、認可者と言われ、またそのようなアートマンがプラディユムナであると言われて

いる。以上のように、最高のアートマンが、五分結合した元素を私と思ひなすヴィラージュや、五分結合していない元素を私と思ひなすヒラニヤガルバにとっての内制者の状態にある、とする説は、アドヴァイタ学派の開祖シャンカラ (Śaṅkara, ca. 700-750) に帰せられる *Pañcīkaraṇa* (PK) やシャンカラの弟子スレーシュヴァラ (Sureśvara, ca. 720-770) に帰せられる *Pañcīkaraṇavārttika* (PKV)、サルヴァジュニヤートマン (Sarvajñātman, ca. 8th?/10th?) の *Pañcaprakriyā* (PPr) に既に見られ ⁽¹²⁾、マドゥスー

ダナの SB⁽¹³⁾ にも受け継がれている。ここではシャンカラ以来の伝統教学である「アートマンの四状態説 (avasthācatuṣṭaya)」⁽¹⁴⁾ に、NUTUp に説かれる羅織と認可者⁽¹⁵⁾、更にヴィューハ説におけるアニルッダとプラディユムナを配当して統合しようとしている。

続いて本稿の主題と関係するサンカルシャナの解説箇所に移る。

Text 2 ĪPP 7, 22-8, 2:

guṇatrayāvacchinnamāyopādhir avyākṛtarūpaḥ sarvabījam anujñocyate, sa eva saṃkarṣaṇaḥ. ayam eva puruṣa īśvaraś ca prāg uktaḥ. etasyaiva bhedaḥ brahmaviṣṇumaheśvarāḥ, triguṇāvacchinna ekaikaḥ guṇāvacchinnaśyāntarbhāvāt. ata eva pṛthañ noktāḥ.

三属性 (guṇatraya) によって限定されたマーヤー (māyā, 幻力) を限定的条件 (upādhi) とし、未発現者 (avyākṛta) をあり方とする [最高のアートマン] が、[NUTUp において] 一切の種子 (sarvabīja) であり、認可 (anujñā) であると言われる。彼こそがサンカルシャナである。彼こそが、プルシャであって、主宰神であると先に述べられた。他ならぬ彼にある諸の違いが、ブラフマー、ヴィシュヌ、マヘーシュヴァラである。三属性によって限定されたものに、一つ一つの属性に限定されたものが含まれているから。当にそれ故に、[ブラフマー、ヴィシュヌ、マヘーシュヴァラは] 個別には説かれていない。

ここでは最高のアートマンという語は見られないが、Text 1 と次の Text 3 という一連のテキストにおいて最高のアートマンが主題となっているので、

ここでも最高のアートマンが主題であると考えられる。その最高のアートマンは、三属性によって限定されたマーヤーを限定的条件とする者であり、未発現者をあり方とし、一切の種子であると言われている。最高のアートマンがマーヤーによって限定され、未発現者をあり方とする状態となることは、PK や PKV 等において既に説かれている⁽¹⁶⁾。また、アートマンを限定するマーヤーが三属性によって限定されたもの、即ち三属性から成るものであることも、既に 14 世紀のサダーナンダ (Sadānanda) 著 *Vedāntasāra* (VeS) に説かれており、SB にも受け継がれている⁽¹⁷⁾。更に、この状態にある最高のアートマンが一切の種子と呼ばれることは、SB に説かれている⁽¹⁸⁾。以上の伝統教学に加え、この状態にある最高のアートマンに、NUTUp に説かれる認可とヴィューハ説におけるサンカルシャナとが配当され、マドゥスーダナはこれらをアドヴァイタ教学に統合しようとしていると考えられる。

ところで、サンカルシャナが、プルシャであり主宰神であって、サンカルシャナにある諸の違いがブラフマー、ヴィシュヌ、マヘーシュヴァラ (シヴァ) であると述べられていた。この記述は、ĪPP の Text 1 以前に説かれた、ヴォーパデーヴァとシヴァ派の教義体系における最高神 (parameśvara) が五様の姿を取るという主宰神論⁽¹⁹⁾ を前提としている。そのヴォーパデーヴァの主宰神論とシヴァ派の教義体系における主宰神論を整理すると、図 1 と図 2 の様になる⁽²⁰⁾。神名の下に括弧付きで記してあるのは、その神を制約している限定的条件である。

ĪPP に見られるヴォーパデーヴァとシヴァ派の教義体系における主宰神論では、最高神ヴィシュヌ或いは最高神シヴァは精神性 (caitanya) と同置されており、その最高神が先ず、自身を制約する限定

図 1 ヴォーパデーヴァの主宰神論

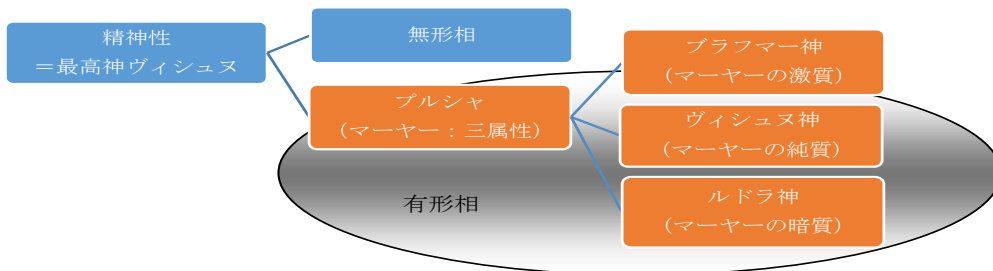
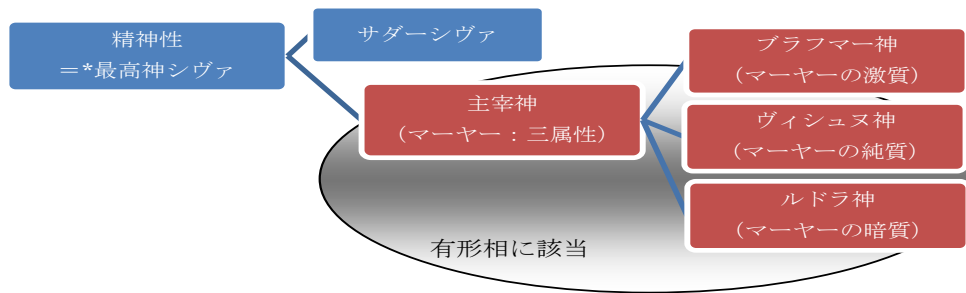


図2 シヴァ派の教義体系における主宰神論



的条件の有無に従って、無形相な一者或いはサダーシヴァと、有形相な一者（ヴォーパデーヴァとシヴァ派の教義体系それぞれにおいてプルシャと主宰神と呼ばれる）とに分けられる。更に、その有形相な一者が、自身の限定的条件であるマーヤーにある三属性の違いによって、ブラフマー、ヴィシュヌ、ルドラ（シヴァ）という有形相な姿を取るとされる。また、図1と図2では、それぞれ精神性と無形相な一者、また精神性とサダーシヴァを分けて記しているが、何らの制約も受けない精神性こそが無形相な一者或いはサダーシヴァなので、実質的には分ける必要はない。

以上のようなĪPPの記述を前提としてText 2を見ると、ここではヴォーパデーヴァとシヴァ派の教義体系における有形相な姿を取った最高神の教理を、サンカルシャナという神格の下に統合しようという意図が見られる。ブラフマー、ヴィシュヌ、ルドラ（シヴァ）、プルシャ或いは主宰神は全て、ヴィューハ説におけるサンカルシャナという神格の姿なのである。

ところで、ヴォーパデーヴァとシヴァ派の教義体系における有形相な姿を取る最高神の教理は、アドヴァイタ教学における主宰神観と一致するものであった⁽²¹⁾。また、Text 2でサンカルシャナの特徴として述べられている、マーヤーを限定的条件とし、未発現者をあり方とし、一切の種子と呼ばれることは、アドヴァイタ教学においては主宰神の特徴である⁽²²⁾。

以上のことに鑑みると以下のことが言えよう。即ち、マドゥスーダナは、パンチャラートラ派のヴィューハ説におけるサンカルシャナをアドヴァイタ教学化し、アドヴァイタ教学における主宰神と同一視した。そしてそのことによって、アドヴァイタ教学

における主宰神の下に、サンカルシャナや、ヴォーパデーヴァのヴィシュヌ派説とシヴァ派の教義体系とにおける有形相な姿を取る最高神を統合したのである。

3. *Īśvarapratipattiprakāśa* におけるヴァースデーヴァとアドヴァイタ教学における目撃者

続いて、ヴィューハ説における最上位の神格であるヴァースデーヴァに関するマドゥスーダナの解説の検討に入りたい。Text 2におけるサンカルシャナの解説に続いて以下の様に述べられている。

Text 3 ĪPP 8, 3f.:

sarvopādhivinirmuktas tv avikalpo vāsudevaḥ
paramātmā mokṣāvalambanam. sa eva sadāśivo
nirākāraś ca.

一方、一切の限定的条件から解放された最高のアートマンが[NUTUpで説かれる]無分別(avikalpa)であり、ヴァースデーヴァであり、解脱の拠り所である。彼こそがサダーシヴァであり、無形相な者である。

一切の限定的条件から解放された最高のアートマンが、NUTUpで説かれている「無分別」であり、またヴァースデーヴァである、というのである。更に、そのヴァースデーヴァは解脱の拠り所とされている。

また、ヴォーパデーヴァやシヴァ派の教義体系における無形相な一者やサダーシヴァがこのヴァースデーヴァである、と述べられているが、無形相な一者やサダーシヴァも限定的条件を有しないものである⁽²³⁾ので、この対応は当然と言えよう。即ち、

このヴァースデーヴァとは、最高のアートマン即ち精神性が何の限定も受けていない、当に本質そのままの状態のことである。

ところで、この Text 3 においては、特にヴァースデーヴァがどのようにアドヴァイタ教義化されているのであろうか。ĪPP では記述が簡単すぎるため、ĪPP と同様のヴィューハ説が説かれている、マドゥスーダナの別の著作 *Paramahamsapriyā* (PP, *Bhāgavatapurāṇaprathamaśloka vyākhyā*) の記述を検討したい。

Text 4 PP 69, 15-17:

anupahitaṃ tu caitanyaṃ sarvānusyūtasamātram
sarvasākṣiparamānandaghanam avikalpa iti
vāsudeva iti cākhyāyate.

一方、制約されていない精神性は、一切のものに [一貫して] 織り込まれた有のみであり、一切のものを目撃者 (sākṣin) である最高の歓喜の塊であり、「無分別」(avikalpa)、また「ヴァースデーヴァ」と呼ばれる。

この Text 4 における制約されていない精神性 (caitanya)、有のみ (°samātra)、最高の歓喜の塊 (°paramānandaghana) という表現は、絶対者ブラフマンの本性を述べる際の「有、知、歓喜」(saccidānanda) ⁽²⁴⁾ に対応していると考えられる。従ってヴァースデーヴァは、絶対者ブラフマン、即ち最高のアートマンそのものを指すと考えられる。また、ヴァースデーヴァが一切のもの「目撃者」と呼ばれているが、このことは、シャンカラの PK 等において、最高位のアートマンが目撃者と呼ばれていること ⁽²⁵⁾ と一致する。従って、ヴァースデーヴァも、アドヴァイタ教学における絶対者ブラフマ

ンとして位置づけられる。そしてこのヴァースデーヴァと同一視される、ヴォーパデーヴァのヴィシュヌ派説における無形相者とシヴァ派の教義体系におけるサダーシヴァも、同様に絶対者ブラフマンとして位置づけられることになる。

ところで、マドゥスーダナは SB の中で、全世界を「見る者」(dṛś) と「見られるもの」(dṛśya) に二分し、更に「見る者」を「目撃者」(sākṣin) と「主宰神」と「命我」(jīva) とに三分していた。更に主宰神は、ブラフマー、ヴィシュヌ、ルドラの三様の姿を取ると言う。その構造を図示すると図 3 の様になる。それぞれの項目名の下の括弧内は、それぞれの限定的条件である。図 3 における主宰神観がサンカルシャナや、ヴォーパデーヴァとシヴァ派の教義体系とにおける有形相な一者の教理に一致することは既に述べた。ここでは更に、この図 3 における目撃者と ĪPP や PP におけるヴァースデーヴァ、無形相者、サダーシヴァとが対応するということを指摘したい。

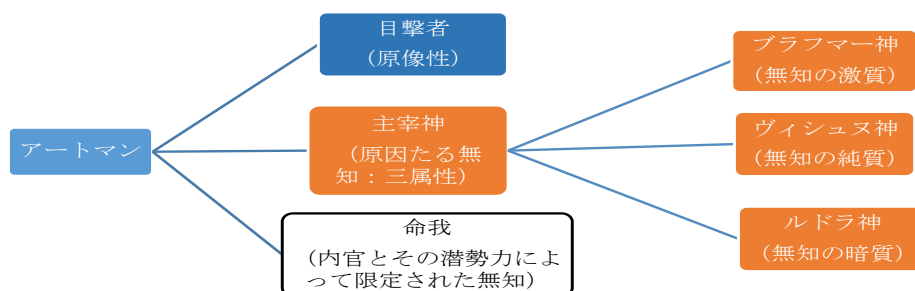
Text 4 においても、ヴァースデーヴァの形容の中に「一切のものを目撃者 (sarvasākṣin) である最高の歓喜の塊」という表現が出てきており、図 3 における目撃者とヴァースデーヴァが対応することに関しては何の問題も無い様に思える。しかし、SB において、目撃者は一見、限定的条件を有していると述べられているように考えられる。

Text 5 SB 372, 1-3:

sākṣī tu sarvānusaṃdhātā sarvānugatas turīyākhyā
ekavidha eva. tatropādhibhedenāpi na kvacid
bhedaḥ. tadupādher ekarūpatvāt.

一方、目撃者は、一切のものの確認者 (anusamdhātṛ) であり、一切のものに随伴する

図 3 *Siddhāntabindu* における「見る者」(dṛś) の構図 ⁽²⁶⁾



者 (anugata) であり、第四位 (turiya) と呼ばれる者であり、一様のみの方 (ekavidha) である。それ (目撃者) には、限定的条件の違いによっても、如何なる場合にも違いはない。その (目撃者の) 限定的条件は一つのあり方を有するから。

この様に、SB において目撃者は一つのあり方を有する限定的条件を持つ、とされている。しかし、「限定的条件の違いによっても、如何なる場合にも違いはない」と述べられているように、この Text 5 の趣旨は、たとえ目撃者に限定的条件があったとしても、それは一つであるから、限定的条件としての働きをなさない、即ち違いをもたらしことはない、ということであると考えられる。それは要するに、限定的条件は存在しないに等しい、ということである。SB における目撃者も限定的条件を有しないということが、別の箇所では以下のように述べられている。

Text 6 SB 441, 2-442, 3:

etat sarvopādāhinarāraṇena sāksicaitanyamātrañānena tu sāksād eva mokṣa iti. ... anupahitaḥ kevalaḥ sāksī turīyākhyo 'ham asmīty arthaḥ.

しかし、一切の限定的条件を否定する、目撃者たる精神性のみを知ることによって、即時的にのみ解脱がある。……私は、制約されておらず、独存者 (kevala) であり、目撃者であり、第四位と呼ばれるものである、という意味である。

ここでは、そもそも目撃者である「私」(aham) が、一切の限定的条件を否定するものであり、ĪPP や PP 同様制約されていないものであることが述べられている。また、目撃者を知ることによって解脱があるということは、ĪPP でヴァースデーヴァが解脱の拠り所と言われていたことと一致する。

以上の Text 5 と Text 6 の記述に基づけば、ĪPP との一致点から、SB における目撃者が絶対者ブラフマンに相当するものであること、またこの目撃者とヴァースデーヴァ、無形相者、サダーシヴァとが対応するということがいえる (27)。

このようにマドゥスーダナは、ヴァースデーヴァをアドヴァイタ教義化することによって、有神論諸派の最高神をアドヴァイタ教義の中に統合的に位置づけている。

4. 結論

以上検討してきたように、マドゥスーダナは、ĪPP において PK 等に見られる「アートマンの四状態説」というアドヴァイタ学派の伝統教学によって、パンチャラートラ派におけるヴィニューハ説のアドヴァイタ教学化を行っている。そのうちのサンカルシャナとヴァースデーヴァに注目して言えば、ヴィニューハ説のアドヴァイタ教学化によって、ヴォーパデーヴァのヴィシュヌ派説やシヴァ派の教義体系における主宰神論をも同時にアドヴァイタ教学の中に統合し、位置付けている。そのことは、ĪPP における主宰神論と SB における目撃者・主宰神観との一致からもうかがえる。つまり、ĪPP における最高神の五つの姿が SB における目撃者と主宰神の四つの姿に対応させられることによってアドヴァイタ教学化している (28)。そしてその目撃者と主宰神がヴィニューハ説の四神格中の上位二神格であるサンカルシャナとヴァースデーヴァに撰取されているが、そのヴィニューハ説も「アートマンの四状態説」によって更にアドヴァイタ教学化されている。このことは、マドゥスーダナが、ヒンドゥー教における有神論諸派の主宰神論をアドヴァイタ教学下に統合し、アドヴァイタ教学によって権威付けているということの意味しよう。そして、このアドヴァイタ学派の思想運動が、後にヴィシュヌ派にもシヴァ派にも属さないヒンドゥー教スマールタ派として結実していくと考えられる。

しかし、ヴィニューハ説を中心にアドヴァイタ教学化することによって、絶対者ブラフマンをヴァースデーヴァに対応させていることからうかがわれるように、マドゥスーダナ個人の思想に関して言えば、反対にヴィシュヌ派化した、ということが言い得るだろう。

参考文献一覧

一次資料

- ĪPP *Īśvarapratīpattiprakāśa* (Madhusūdhana Sarasvatī): *The Īśvarapratīpattiprakāśa by Madhusūdanasarasvatī*. Ed. T. Gaṇapathi Sāstrī. (Trivandrum Sanskrit Series No. LXXIII) Trivandrum: The Superintendent, Government Press 1921.
- NUTUp *Nṛsiṃhottaratāpanīyopaniṣad: Nṛsiṃhapūrvott-*

- aratāpanīyopaniṣad. Ed. Ānandāśramasthapaṇḍita (Ānanda Āśrama Sanskrit Series 30) Pune: Ānanda Āśrama 1929.
- PK *Pañcīkaraṇa* (Śaṅkara): *Āryaśrīśaṅkarācārya's Pañcīkaraṇam with Four Commentaries (I) Sureśvara's Vārtika (II) its com. Vārtikābharaṇa by Nārāyaṇa (III) Ānandagiri's Vivaraṇa & (IV) its com. Tattvacandrikā by Rāmatīrtha*. Pr. Ed. Śrī Bhāuśāstrīvajhe, Ed. Kameshwar Nath Mishra. (The Kashi Sanskrit Series 7) Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Sansthan 2nd Ed. 1984.
- PKV *Pañcīkaraṇavārttika* (Sureśvara): See PK.
- PP *Paramahamsapriyā* or *Bhāgavatapurāṇaprathamaś-lokavyākhyā* (Madhusūdana Sarasvatī): *The Harilīlāmṛtam by Śrī Bopadeva with Commentary by Śrī Madhusūdana Sarasvatī and Śrī Bhāgavata (First Śloka) with The Paramahamsapriyā commentary by The Same Commentator*. Ed. Parajuli Pandit Devi Datta Upadhyaya (Chowkhamba Sanskrit Series no. 411) Benares: The Chowkhamba Sanskrit Series office 1933.
- PPr *Pañcaprakriyā* (Sarvajñātman): *Language and Release: Sarvajñātman's Pañcaprakriyā*. By Ivan Kocmarek. Delhi: Motilal Banarsidass 1985.
- SB *Siddhāntabindu* (Madhusūdana Sarasvatī): *Siddhāntabindu of Madhusūdana Sarasvatī: Being a Commentary on the Daśāśloka of Śaṅkarācārya With two Commentaries Nyāya Ratnāvalī of Gaudabrahmānanda and Laghuvyākhyā of Nārāyaṇa Tīrtha*. Ed. Tryambakram Śāstrī Vedāntācārya (The Kashi Sanskrit Series 65) Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Sansthan 2nd Ed 1989.
- VeS *Vedāntasāra* (Sadānanda): *Vedānta-Sara (The Essence of Vedānta) of Sadānanda Yogindra*. Ed. and Tr. Swami Nikhilananda. Calcutta: Advaita Ashrama 1931 (10th Impr: 1997).

二次資料

Gupta, Sanjukta

[2006] *Advaita Vedānta and Vaiṣṇavism: The Philosophy of Madhusūdana Sarasvatī*. London and New York: Routledge.

Kambayashi, Ryujo (神林隆浄)

[1975] 「ヌリシンハ・ウッタラ・ターパニーヤ・ウパニシャット 《人獅子に関するターパニーヤ派の奥義後篇》」『ウパニシャット全書 第四巻』高楠順次郎監修, 東方出版, pp. 182-220.

Kanakura, Yensho (金倉圓照)

[1976] 「シャンカラの小作品その二 パンチーカラナとそのヴァールッティカ」『インド哲学仏教学研究 [III] インド哲学篇 2』春秋社, pp. 203-227.

Kocmarek, Ivan

[1985] See PPr.

Manabe, Tomohiro (眞鍋智裕)

[2014] 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーの vyūha 説撰取の方法—シャンカラの諸説との対比から」『久遠—研究論文集』5, 早稲田大学仏教青年会.

[f.] 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーの主宰神観の形成に関する一考察」(forthcoming).

Matsubara, Mitsunori (松原光法)

[1990] 「パンチャラートラ初期のヴェーハ説」『密教文化』172, 高野山大学密教研究会.

[1996] 「初期パンチャラートラのヴェーハ理論」『古代文化』48, 古代学協会.

Modi, P. M.

[1929] *Translation of Siddhanta Bindu: Being Madhusūdana's Commentary on the Das'as'loki of S'ri S'ankaracharya*. Tr. Allahabad: Vohra Publishers & Distributors (Repr: 1985).

Nakamura, Hajime (中村元)

[1996] 『中村元選集 [決定版] 第 27 巻 ヴェーダーンタ思想の展開』春秋社.

Watase, Nobuyuki (渡瀬信之)

[2013] 『マヌ法典』平凡社.

注

(1) 残りの四派は以下の様である。即ち、被制限者不二一元論 (Viśiṣṭādvaita) 学派, 二元論 (Dvaita) 学派, 本質的不一不異論 (Svābhāvikaḥedābheda) 学派, 純粹不二一元論 (Śuddhādvaita) 学派である。

(2) アドヴァイタ学派以外のヴェーダーンタ伝統学派は全てヴィシュヌ派に属する学派である。

(3) S. グプタ女史は, ĪPP がマドゥスーダナの真作かどうかという点に対して疑義を呈している。Gupta [2006] p. 10 参照。筆者は, ĪPP はマドゥスーダナの真作と考えている。その理由としては, ĪPP に見られる主宰神観はマ

ドゥスーダナのSBとPPに見られるものと一致する点が挙げられる。更に、マドゥスーダナに影響を与えたと考えられ、アドヴァイタ学派においてはほとんどマドゥスーダナの著作においてのみ言及されるヴォーパデーヴァに対する記述が見られる点も挙げられる。

また、たとえマドゥスーダナの真作ではなかったとしても、ĪPP 作者はマドゥスーダナとかなり近似した思想の持ち主であったと考えられる。その意味で、ĪPP はマドゥスーダナ派の著作と呼び得ると考える。その場合、本稿の考察は、マドゥスーダナ派の思想を扱ったものとして読み換えていただければ幸いである。

(4) 眞鍋 [f.] を参照。

(5) ĪPP に紹介されるヴォーパデーヴァ説やシヴァ派の教学は、既にアドヴァイタ教学化された形で ĪPP に登場している。その点に関しては眞鍋 [f.] を参照。本稿では、その既にアドヴァイタ教学化されているヴォーパデーヴァ説とシヴァ派の教学が、更にアドヴァイタ教学化されたヴィューハ説の中に統合され、位置づけられていることを明らかにする。

(6) 眞鍋 [f.] 参照。

(7) See ĪPP 7, 17f.: nrsimhatāpanīye tu caturdhā vibhāga uktaḥ - “oto ’nujñātānujñāvikalpaḥ” iti (しかし、『ヌリシンハ [・ウッタラ]・ターパニーヤ [・ウパニシャッド]』には【主宰神の】四様の区分が説かれている。「羅織であり、認可者であり、認可であり、無分別である」と)。NUTUp には以下のように説かれている。See NUTUp 106, 3-107, 1: mātrābhir otānujñātranujñāvikalparūpaṃ cintayan grasen ([聖音オームのア, ウ, ム, 半音量 (ardhamātra) という] 諸音量によって、羅織、認可者、認可、無分別をあり方とするものを観想して、[それを] 呑み込むべし) etc. また、NUTUp には以下のような四状態も説かれている。See NUTUp 92, 6f.: bhavati ca sarveṣu padeṣu caturātmā sthūlasūkṣmabījasākṣibhiḥ (全ての句に、粗大なもの、微細なもの、種子、目撃者 [という違い] によって、四つのアートマンがある) etc.

(8) ヴィューハ説の詳細に関しては松原 [1990], [1996] 等参照。

(9) 筆者は、ヴィューハ説はシャンカラによって批判されていること、またマドゥスーダナもパンチャラートラ派の説くヴィューハ説は批判していること、アドヴァイタ教学と矛盾しない限りにおいてマドゥスーダナはヴィューハ説を採り入れていることを眞鍋 [2014] において論じた。

(10) 五分結合した元素は粗大な元素とも言われ、地、水、

火、風、虚空の五粗大元素が挙げられる。それらはいずれも、五分結合していない地、水、火、風、虚空の五微細元素から構成される。例えば地の粗大元素であれば、その半分が五分結合していない地の微細元素で構成され、残りの半分がそれぞれ水、火、風、虚空という四つの微細元素から構成される。従って、粗大元素は五つの微細元素全てから構成されていることとなる。そのため五分結合 (pañcīkṛta) と呼ばれている。同様に他の粗大元素も、何れも地、水、火、風、虚空の五微細元素を有する。個々の粗大元素は、それらのうちの主要な要素の名で呼ばれるのである。金倉 [1976] p. 209 と中村 [1996] p. 252, fn. (1) とを参照。

(11) ヴィラージュとは、ヴェーダ聖典において最高原理とされるものの一つである。また、*Manusmṛti* においては、ブラフマーの息子であり、人類の祖マヌの父とされる。渡瀬 [2013] p. 25 参照。

(12) しかし、PK 等では、ヴィラージュやヒラニヤガルバはアートマンの身体と言われている。See PK 1, 11-2, 2: pañcīkṛtapañcamahābhūtāni tatkāryaṃ ca sarvaṃ virāḍ ity ucyate. etat sthūlaśarīram ātmanaḥ. ... apañcīkṛtapañcamahābhūtāni pañcatanmātrāṇi tatkāryaṃ ca pañca prāṇāḥ, daśendriyāṇi mano buddhiś ceti saptadaśakaṃ liṅgaṃ bhautikaṃ hiraṇyagarbha ity ucyate. etat sūkṣmaśarīram ātmanaḥ (五分結合した五大元素とその結果である全てのものは、ヴィラージュと言われる。これはアートマンの粗大な身体 (sthūlaśarīra) である。……五分結合していない五大元素である五唯と、その結果である、五つの息・十の器官・思考器官・統覚という元素所造 (bhautika) の十七からなる微細身 (liṅga) は、ヒラニヤガルバと言われる。これはアートマンの微細な身体 (sūkṣmaśarīra) である) ; PPr 131, 5-9: apañcīkṛtapañcamahābhūtāni tatkāryaṃ ca saptadaśakaṃ liṅgaṃ hiraṇyagarbhaḥ, etat sūkṣmaśarīram ātmanaḥ. ... etāni pañcīkṛtamahābhūtāni tatkāryaṃ ca brahmāṇḍaṃ prāṇināṃ sthūlaśarīrajātaṃ ca sarvaṃ virāḍ ity ucyate. etat sthūlaśarīram ātmanaḥ (五分結合していない五大元素と、その結果である十七からなる微細身はヒラニヤガルバであり、これはアートマンの微細な身体である。……これらの五分結合した [五] 大元素と、その結果である梵卵と粗大な身体から生じた生類との全ては、ヴィラージュと言われる。これはアートマンの粗大な身体である)。ヴィラージュやヒラニヤガルバがアートマンの身体である、ということは、アートマンがヴィラージュやヒラニヤガルバの内部に存在することと考えられる。その視点から言うと、アートマンはヴィラージュやヒラニ

ヤガルバの内部にある内制者ということとなる。

ところで、PK と PKV がシャンカラとスレーシュヴァラの真作であるか否かに関しては問題があるが、PPr と前二著は、ほぼ同じ文章が見られる等密接な関係があると考えられる。記述内容がより素朴なことから見て、これら三著は SB 以前の作品であり、SB に影響を与えたことは間違いないと考える。

(13) SB には以下のように説かれる。See SB 386, 387, 2: etac ca sarvaṃ militvā saptadaśakam liṅgam jñānaśaktiprādhānyena hiraṇyagarbha iti kriyāśaktiprādhānyena sūtram iti cocyate. ayam amūrtapadārthaḥ kāryatvād vyaṣṭau samaṣṭau ca jīvopādhir eva (そして、以上全てが集って十七から成る微細身があり、[それは] 知の能力が優勢であることによってヒラニヤガルバと、そして行為作用の能力が優勢であることによってストラと呼ばれる。この無形な実体は、[無明の] 結果であるので、個別体の場合にも総体の場合にも命我の限定的条件に他ならない) ; SB 394, 2-395, 1: etat sarvaṃ brahmāṇḍākyam virāḍ iti mūrtam iti cocyate (この一切 [の粗大な現象世界] は、梵卵 (brahmāṇḍa) と呼ばれるヴィラーージュ、有形のもの、と呼ばれる)。しかしヴィラーージュに関しては、それがアートマンの限定的条件であると明示されていない。

(14) この「アートマンの四状態説」は、唯一のアートマンに、第四位、熟睡状態 (主宰神の状態)、夢眠状態 (ヒラニヤガルバの状態)、覚醒状態 (ヴィラーージュの状態) があるというものである。この教学の伝統は、その確実な起源を *Māṇḍūkyaopaniṣad* (MāṇḍUp) の「アートマンの四足 (caturpada) 説」まで辿れる。この「アートマンの四足説」から「アートマンの四状態説」へという思想史的展開に関して、別の機会に論じる予定である。

(15) fn. 7 参照。NUTUp に見られる「羅織、認可者、認可、無分別」という概念が具体的にどのようなものであるか、筆者はまだ十分理解できていない。今後 NUTUp を精読してこの点を明らかにする必要がある。

(16) See PK 2, 5f.: śarīradvayakāraṇam ātmājñānam sābhāsam avyākṛtam ity ucyate. etat kāraṇaśarīram ātmanah (未発現者とは、二種の身体の原因であり、アートマンへの無知であり、顕現を伴うものである、と言われる。これがアートマンの原因としての身体 (kāraṇaśarīra) である) ; PKV: ātmājñānam tad avyaktam avyākṛtam ifryate / na san nāsan na sadasad bhinnābhinnam na cātmanah //40// (そのアートマンへの無知は、未顕現なもの (avyakta), 未発現なもの (avyākṛta) と述べられる。[アートマンへの無知は] 有ではなく、非有でもなく、有且つ非有でもなく、そしてア-

トマンから区別され且つ区別されていないのでもない)。ところで、VeS においては未発現者 (avyākṛta) ではなく、未顕現者 (avyakta) とのみ呼ばれている。See VeS 27, 16-18: etadupahitam caitanyam sarvajñatvasarveśvaratvasarvanīyantrtvādiguṇakam avyaktam antaryāmī jagatkāraṇam īśvara iti ca vyapadiśyate (そして、これによって制約された精神性は、一切智者であることと一切の支配者であることと一切の統御者であること等という属性を有し、未顕現なものであり、内制者であり、世界の原因であり、主宰神である、と言われる)。PKV の例のように、両者は主宰神の状態にあるアートマンの制約者として同時に言及されることがある。また SB に関しては fn. 18 参照。

(17) See VeS 21, 31f.: ajñānam tu sadasadbhyām anīrvacanīyam triguṇātmakam jñānavirodhi bhāvarūpam yatkiṃcid iti vadanti (一方無知とは、有とも非有とも述べられ得ない、三属性を本性とする、知と相反する、存在をあり方とする或るものである、と [或る者達は] 言う)。VeS の時代までにはマーヤーと無知 (ajñāna), 無明 (avidyā) は同一視されるようになっている。中村 [1996] p. 300 参照。SB に関しては真鍋 [f.] 参照。

(18) しかし、SB において種子は、主宰神の限定的条件である未発現者の能力とされている。See SB 372, 7-374, 1: tatra sābhāsāvidyā mūrtāmūrtaprapaṇcabījaśaktirūpā tadajan-yatve 'pi tannivṛttau nivartamānatvena tadvyāpyaiḥ caitanyatatsambandhajīveśvaravibhāgacidābhāsaiḥ sahnānādītvād avyākṛtam ity ucyate. ayam cāvyaākṛtapadārtha īśvaropādhiḥ (その (有形のもの、無形のもの、未発現者の) うち、有形のものとは無形のもの [から成る] 現象世界の種子という能力をあり方とする、[心の] 顕現を伴う無明が、未発現者と言われる。それ (顕現を伴う無明) から生じていなくとも、それ (顕現を伴う無明) が消滅する時に消滅するものとして、それ (顕現を伴う無明) によって遍充される、精神性とそれ (精神性) と結合した命我と主宰神との区別を持つ心の顕現と共に始まりを持たないから。そして、この未発現者という語の対象は主宰神の限定的条件である)。また、NUTUp においてもアートマンは種子と呼ばれている。fn. 7 参照。

(19) ヴォーパデーヴァとシヴァ派の教義体系における主宰神論に関しては、真鍋 [f.] 参照。

(20) この図 1 と図 2 は真鍋 [f.] で既に図示したものである。

(21) この点に関しても真鍋 [f.] 参照。真鍋 [f.] では、アドヴァイタ教学における主宰神観は、ヴォーパデーヴァの著 *Muktāphala* の影響を受けたのではないかということを論じた。

(22) fn. 18 参照.

(23) See ĪPP 7, 13f.: tatra sadāśivo nirākāraś ceti nirupādhicaitanyasvarūpaḥ siddha ekaḥ (その(ヴォーパデーヴァ説とシヴァ派の教義体系とにおける各五神の)うち、サダーシヴァと無形相な者とは、限定的条件を欠いた(nirupādhi)、精神性を本質とする者(caitanyasvarūpa)として成立している、唯一者(eka)である).

(24) 例えば、ĪPPには以下のような記述がある。See ĪPP 4, 17f.: vedāntavedyaḥ saccidānandarūpaḥ sarvajñaḥ sarvaśaktiḥ sarvajagadupādānaṃ nimittaṃ ca paramātmaiva parameśvara iti brahmavādiṇaḥ (ヴェーダーンタによって知られる、有・知・歡喜(saccidānanda)をあり方とし、一切知者(sarvajña)であり、一切の能力(sarvaśakti)を有し、一切世界の質料因(upādāna)であり、且つ契機因(nimitta)である最高のアートマンこそが最高神である、とブラフマン論者は[考える]).

(25) See PK 2, 13f.: aham ātmā sākṣī kevalaś cinmātrasvarūpaḥ, nājñānaṃ nāpi tatkāryam (私はアートマンであり、目撃者であり、独存者であり、心のみを本質とするものであり、無知ではなく、その結果でもない); PKV: paramānandasamdhavāsudevo 'ham om iti / jñātvā vivecakaṃ cittaṃ tatsākṣiṇi vilāpayet //51// (私は、最高の歡喜であり、充満した者であり、ヴァースデーヴァであり、オームである、と知って、識別者である心を、その目撃者に融解せしめよ.)

(26) 図3も真鍋[f.]において既出である。また、命我もヴィシュヴァ、タイジャサ、ブラージュニャという三様の姿を取ると言われる。SB 370, 1-371, 1 参照。しかし、この図3では省略した。

(27) しかし Gupta[2006]によれば、マドゥスーダナの *Advaitasiddhi* (AS) においては、絶対者ブラフマン、目撃者、主宰神、命我は全て概念的に異なるものとされる。Gupta[2006] pp 88-99 参照。従って、ASにおけるブラフマン観や目撃者観と、ĪPPにおけるブラフマン観や目撃者観とはズレがあることが予想される。このズレが本当に存在するのか否か、またその場合、マドゥスーダナのブラフマン観や目撃者観に関して統一的な見解を導き出せるか否かに関して、ASやその他の彼の著作を精読し、検討する必要がある。

(28) この点に関しては真鍋[f.]参照。

(29) 因みに、PPにおいては、マドゥスーダナはヴィシュヌ派の一派サートヴァタ派(sātvata)の見解として本稿で検討したアドヴァイタ教学化したヴィニューハ説を述べるが、ĪPPにおいては自説として同説を述べる。そのため、

マドゥスーダナの思想に何らかの変化があったことが予想されるが、この点に関しては、ĪPPの真作問題も含め、彼の他の有神論的著作を検討する必要がある。